

市民スポーツの現状と求められる姿勢（市政）

全国市長会は6月9日、全国都市会館において「市長フォーラム2015」を開催しました。

フォーラムでは、森会長が開会あいさつを行った後、「市民スポーツの現状と求められる姿勢（市政）」と題して、スポーツ・ライターの青島健太氏による講演が行われました。青島氏は最新のデータからわが国の成人のスポーツライフの動向を紹介するとともに、ご自身の体験を踏まえながら、スポーツ環境の整備、その考え方などについて説明し、市長をはじめとした約680名の参加者が耳を傾けました。さらに、講演の後には、出席市長との活発な意見交換も行われました。

ここでは、講演の様様をお届けします。



市民スポーツの現状と求められる姿勢(市政)

スポーツライター 青島健太 あおしまけんた

最新データから、日本人のスポーツ動向を探る

東京オリンピック・パラリンピックの開催を5年後に控えた今、市民はどのようなスポーツに取り組み、興味を持っているのか。本日は、笹川スポーツ財団が全国20歳以上の男女2000人を対象に2014年6月から7月にかけて実施した「スポーツライフに関する調査2014」(以下、「同調査」)を基に、最新の動向をご紹介します。ちなみに、同財団ではこの調査を1992年から隔年で実施しており、今回は12回目の調査となります。

皆さまもお仕事に取り掛かる際には、資料点検など、事前準備をなさると思います。私は野球をやっております関係で、まずはグラウンドコンディションを確認するのを常としていました。それでは、私なりに、この会場のコンディションを調べさせていただきたいと思えます。

「私は血液型はO型で、生まれは新潟です」

いやあ、滑りやすい現場ですね。場内が静まり返っています。もっとも「がた」が韻を踏んでいるだけなので、当然の反応でしょうが…。

では、風向きも調べさせていただきます。「私は27歳でプロ野球の世界に入った当初、バリバリ活躍する青写真を描いていたのですが、いつの間にか、試合に出られない日々を過ごすようになりました。よくよく調べてみたら、入団するチームを間違っていたんです。私が入ったチームは『ヤクルトベンチにスワローズ』でした」

うーん、風も冷たいですね。しかし、コンディションに負けず、空振り三振しないように、何とか頑張りたいと思います。

まず、高いところから恐縮ですが、この1週間、運動やスポーツをされた方、お手を挙げていただけますか。ざっくり言って、半分ぐらいですね。同調査によると、この1年間に何らかの運動・スポーツを行わなかった人の割合は26・4%でした。4人中3人は何らかの運動・スポーツを行っているということです。

次に、皆さまにお聞きした、週1回以上の運動・スポーツの実施率を見ると、日本は57%。EU28カ国と比較すると、スウェーデン、デンマーク、フィンランド、オランダに次いで5位という結果です。北欧の上位3国は市民スポーツが非常に盛んで、スポーツを1年間まったく行わなかった割合も、15%以下に抑えられています。日本もスポーツの浸透に関しては、まだまだ伸びしろがあることを、この結果は示しているといえるでしょう。

では、日本人は実際にこの1年間、どのような運動・スポーツに取り組んでいるのか、種目別運動の実施率を見ましょう。第1位が「散歩(ぶらぶら歩き)」、以下「ウォーキング」「体操(軽い体操、ラジオ体操など)」「筋力トレーニング」「ボウリング」「ジョギング・ランニング」と続きます。多くの人が、「歩く」ことを日々の生活に取り入れているということが分かります。

同調査では今後行いたい運動・スポーツ種目についても尋ねています。それによると、「ウォーキング」と「散歩」が同率(27・3%)で首



位。以下、「筋肉トレーニング」「体操」「水泳」「ヨガ」「釣り」「登山」という結果になりました。

上位種目を眺めてみると、共通点もいくつか見つけれられます。まず、1人でできる種目であること。さらに、ヨガは典型的でしょうが、激しく体を動かす種目よりも、心と体のバランスを調整するような種目が支持されています。さらに、1人でできる種目でありながら、仲間と交流でき、かつ自然と触れ合うことができる種目も上位に位置しています。

過去1年間によく行った運動・スポーツ種目における施設の利用状況については、「道路」が最も利用率が高く、次いで「自宅(庭・室内等)」「公園」「体育館」「高原・山」「海・海岸」という結果になりました。これまで物流や交通運輸の観点から「道路」の整備は行われてきたわけですが、

が、意外と多くの市民が運動・スポーツを行う場所として「道路」を活用しています。となれば、今後はスポーツをしやすい道路整備の在り方について議論していくことも重要になるだろうと思います。

日本人はどんなスポーツを 観戦したいか

スポーツは実際に行うだけでなく、観る楽しさも魅力の1つです。過去1年間に体育館・スタジアム等へ足を運んで直接スポーツ観戦した方の種目別の状況を見てみます。結果は「プロ野球(NPB)」が1位、以下「Jリーグ」「高校野球」「マラソン・駅伝」「アマチュア野球(大学、社会人など)」「バスケットボール(高校、大学、JBLなど)」「プロゴルフ」と続きますが、こ

で着目したいのは観戦頻度(リピーター率)です。この項目では何と「バスケットボール」が年平均8・10回と首位で、2位は「アマチュア野球」が7・26回でした。

バスケットボールでは、ファンのことを「ブースター」と呼びます。電圧の昇圧器を表す「booster」から来た言葉で、相手チームに圧力を掛けるという意味合いで使われています。ご承知の通り、現在、バスケットボールは新しいプロリーグの設

立に向けて、5000人規模のホームアリーナの設置など、厳しい参加要件が決められています。ホームタウンとして、難しい対応を迫られる自治体もあるでしょうが、チームを熱狂的に愛し、後押ししてくれる「ブースター」の存在をうまくパワーにできるかという点が、問われてくるのではないかと思います。

次に、今後、直接スポーツ観戦を希望する種目について見てみましょう。「プロ野球(NPB)」が最も高く、「フィギュアスケート」「サッカー日本代表(五輪代表含む)」「高校野球」「Jリーグ」「大相撲」と続きます。高校野球は別にして、代表クラスや高レベルの種目に支持が集まっています。

この中でいかにも日本的な競技が「大相撲」ですが、現在の幕内力士の4割は外国人力士が占めているように、実は極めてインターナショナルなスポーツでもあります。代表クラスの種目が人気を集めていることからいえば、むしろこの国際性の高さをうまくアピールした方が、相撲人気は高まり、盛り上がるかもしれません。

あなたは長嶋派、それとも野村派?

同調査では好きなスポーツ選手についても尋ねています。1位は「浅田真央」で、次いで「イチロー」「田中将大」「羽生結弦」「本田圭祐」「香川真司」「長嶋茂雄」でした。2006年から前回の2012年調査まで1位だったイチロー選手を抑えて、今回初めて浅田真央選手が1位となったのは、ソチオリンピックが終わった直後



に調査が行われた影響もあるかもしれませんが。昭和世代の私にとってうれしいのは、長嶋茂雄さんが7位に入っていることです。調査対象を男性に限れば何と3位です。恐らく、票を投じた方のほとんどが、現役時代、監督時代を見てきた世代の方々でしょう。監督を辞められてから10年以上経つにもかかわらず、ずっとリンクインし続けているところに、改めて長嶋さんの存在感の大きさを認識させられます。

長嶋さんは誰もが認めるメディアの寵児、昭和のヒーローです。ではなぜこれほどの人気を誇っているのか。現役時代のダイナミックなプレーも魅力ですが、やはりインタビュの面白さも要因の一つに挙げられると思います。

長嶋さんの話し方には特徴があります。文法的に言えば、主語と述語が一致しない。「今日のゲームはどうでしたか」と過去のことを聞いても、話が着地するのは必ず未来ですから、時制も合わない。しかも、長嶋さんの話は意味が拡散してしまうので、いろいろな解釈が成立して、誰も傷つけないし、未来への希望にあふれた内容なので、聞いている人は楽しいのです。

さらに左ピッチャーは「レフティーズ」、新戦力は「ヤングコマンド」、新人は「ヤングボーイ」というように、誰も使わないカタカナ語をあたかも世界中で通用するかのように使うのも長嶋流。これがある種の新鮮さやニュース性を生むのです。

監督時代の長嶋さんがある日、甲子園球場に乗り込んだときのことです。突然の雨に気付いた長嶋さんが私に「青島君、レインですね」と言いました。「雨ですね」といえば、何てこともない会話に過ぎませんが、「レイン」と言ってしまうことで、「長嶋さんって面白い」と付加価値がついてしまう。だからこぞってメディアに取り上げられたのです。

一方、長嶋さんと対極に位置しているのが野

村克也さんです。野村さんはロジカルの極みです。プロ野球に初めて数学を持ち込んだ人でもあります。相手の先発ピッチャーを攻略するために、前回の登板で各バッターに投げた1球目の球種とコースを調べ上げて、それを選手に叩き込む。いわば「傾向と対策」を提示してくれるわけです。若い世代にも分かりやすいので、いくつになられても監督待望論が絶えません。

恐らくこれだけの市長さんがおられても、長嶋派と野村派に分けることができるのではないのでしょうか。情熱を込めて演説される方もいれば、逆に冷静に、筋道を立ててお話しされる方もいるでしょう。どちらにプライオリティを置くかで、違いや特徴が出てくると思います。スポーツの世界でも、選手それぞれに個性がありますが、いずれも長嶋派、野村派に大別できます。

重要性を増す、スポーツボランティア

次に、スポーツボランティアに話題を移したいと思います。東京オリンピックピックで、どういうボランティアを行いたいのか、その内容について尋ねたところ、「競技場での選手誘導などの運営補助」「入場口でのチケット等の確認」「競技場内での来場者の誘導」「競技場外でのチケットなどの販売」「選手村での清掃や食事配膳」に支持が集まっています。できるだけ選手の傍にいたい、余ったチケットなども入手したいという心理も働いているように思いますが、実際、ス

ポーツ大会には、さまざまな裏方の仕事があり、これに従事してくれるボランティアがいるからこそ、スムーズな運営が可能になります。現状では日本のボランティアの参加率は、海外に比べて高くありません。東京オリンピック・パラリンピックに向けて課題の一つと聞いていいでしょう。

実際、各地で行われているスポーツイベントにおいても、ボランティアの存在は重要です。例えば、私の生まれ故郷である新潟市では「早起き野球大会」を開催しています。今年50周年を迎える大会ですが、ピーク時の昭和56年の参加チーム数は944、成人男性の7人に1人が参加したほどの人気イベントで、今でも日本一の参加チーム数を誇ります。さらに、この大会の面白い点は、勝ったチームが翌朝の試合の審判を手伝うのが慣例になっていることです。このように参加者を自然と運営側に取り込んでいく点も、この大会が長く続いている理由の一つではないかと思っています。

私がスポーツボランティアに初めて携わったのは、プロ野球選手を引退し、オーストラリアの小さな町の中高一貫校で8カ月ほど、日本語教師をしていたときのことでした。そこで、校長先生から頼まれて、野球の指導も行うことになったのです。現地はクリケットが盛んですから、バットの扱いもうまい。野球もメキメキ上達しました。

せっかくですから、試合をさせたいと思っ

たのですが、400kmぐらい車で走らないと、相手がいない。そこで、先生チームと試合することになりました。われわれのチームは15人です。そこで、レギュラーとして9人を選んだのですが、試合が始まったら、15人全員が守りについちゃった。指導者として、面目丸つぶれです。

でも、そのときに思ったのです。みんなやる気があるのだから、これはこれでいい光景じゃないかと。そこで、守りから戻ってきた彼らに15番まで打順をつけたのですが、グラウンドを見渡せば、先生チームは25人で守っていました。結局、15人対25人で試合をすることになりました。

私のように野球を生業としていた者にとつて、9人対9人以外の野球をイメージすることはできません。しかし、そんな私も子どものときに野球を始めたときには、9人対9人の野球をやったことはありません。集まった子どもの数に応じて、自由気ままにやっていたものでした。

プロであればあるほど、長いことその世界で活躍すればするほど、柔軟な発想を失っていないかどうか、常に頭の片隅に置いておかなければいけないと私は思います。実際、あのイチロー選手が、長らく人気を保っている一番の理由は、しなやかさにあると思います。どんなボールに対しても、しなやかに対処する。これこそ、日本人の価値観の中心にあるものではな

いか。だからこそ、それを表現しているイチロー選手に支持が集まるのだと思います。

最後に、一つ申し上げたいことがあります。それは、スポーツは平和だからこそ楽しめるということだと思います。世界各地を取材した立場から言わせていただくと、スポーツの推進は平和の推進に確実につながります。その意味でも、どうか、各都市におきまして、スポーツの取り組みをより一層、推進していただければ幸いです。ご清聴、ありがとうございました。

